

# 「人々のなかの遺跡 (*in populo site*) への教育的ダーク・ツーリズム—エルサレムのホロコースト記念館<sup>i</sup>」(エリック・コーエン<sup>ii</sup>著) について

## 『ツーリズム研究年報』 所収論文・解説と翻訳

神戸夙川学院大学観光文化学部准教授 小槻 文洋

### 【目次】

#### 1. 解説

#### 2. 翻訳

はじめに

教育的ダーク・ツーリズム

教育的ダーク・ツーリズムにおける真正性

イスラエル、ヨーロッパ、アメリカ合衆国のショアーの解釈

エルサレムのショアーを研究する

研究手法

調査対象人口

結果

ダーク巡礼とオーセンティックな意味の探求

位置 (*location*) の真正性

考察

場所の真正性：原位置の (*in situ*) 場所と人々の (*in populo*) 記憶の場所

結論

原位置の (*in situ*) と人々の (*in populo*) の相互作用

参考文献

ラン大学教育学部 (the School of Education at Bar-Ilan University) 上級講師 (Senior Lecturer) である Eric H. Cohen が、*Annals of Tourism Research*, Vol.38, No.1, 2011, pp.193-209 において発表した、Educational Dark tourism to *in populo site*—Holocaust museum in Jerusalem の解説と全訳である。

Cohen の論文が扱うダーク・ツーリズムは、「死や災害に関連する場所へのツーリズム」を意味し、日本でも「暗い土地をめぐる旅」<sup>iii</sup>、「戦争、郊外など、人間にとって負の遺産を対象にした観光」<sup>iv</sup>として紹介されてきた。一般書でも、戦争の記憶をいまに伝えるミュージアム／メモリアルを1冊にまとめたガイドブックとして「記憶と表現」研究会(2005)<sup>v</sup>があり、沖縄戦、広島／長崎への原爆投下、大空襲、戦時動員／戦場／加害、戦後の平和運動、大東亜戦争に対する日本とアジア諸国の認識の差、ユダヤ人虐殺や9・11テロなどに関わる国内・海外の施設を取り上げているし、新崎ほか(2008)<sup>vi</sup>は、沖縄戦の戦跡、米軍基地などを取り上げている。最近では、破たん自治体を見学する北海道夕張市のダーク・ツーリズム<sup>vii</sup>、朝鮮戦争をテーマとする釜山市でのダーク・ツーリズム<sup>viii</sup>なども試みられている。

本学が位置する神戸市も阪神淡路大震災の被災地であり、各地に多数の震災慰霊碑が存在する。

### 1. 解説

本稿は、エルサレム (イスラエル) のバル・イ

神戸港にはメリケン波止場の一部を震災で壊れた状態のまま保存した「神戸港震災メモリアルパーク」があり、神戸市役所に近い東遊園地内には「慰霊と復興のモニュメント」や「1.17 希望の灯り」、HAT 神戸地区には「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」がある。これらの震災関連のモニュメントや施設を校外学習の際に訪れる学校も多く、毎年1月17日には「阪神淡路大震災 1.17 のつどい」や「メモリアルウォーク」が実施されている。こうした試みもダーク・ツーリズムと捉えることができるだろう。

昨年3月11日に発生した東日本大震災でも、被災地は依然復旧・復興の途上にある。死者を悼み、震災の記憶を語り継ぐうえで、ダーク・ツーリズムは一定の役割を果たしうるかもしれない。

Cohen の論文の意義は、こうしたダーク・ツーリズムにおいて観光者の心を動かす源は何かをユダヤ人迫害＝ショアーを事例に問い直し、観光における真正性の議論につなげた点にある。従来の研究が、立地の真正性 (authenticity of location)、すなわち事件が起きた場所を訪れることを重視してきたのに対し、本論文で Cohen は、その事件を記憶している人々との交流こそが真正性をもたらす重要な要素だとし、'in situ' (もともとの位置にある) と対比して 'in populo' (人々のなかの) という新しい用語を提起する。この語は、論文中で 'in populo site' (人々のなかの遺跡) などと使われており、事件にかかわった人々の間に形成された事件に関する集合的記憶を指すと理解できる。

Cohen のこうした主張は、[記憶と表現] 研究会(2005)の以下の記述と対応する。

戦争の実態になかなか届かない私たちの想像力の助けとなってくれるのは、一つには戦争を経験した人の物語を聞くこと、もう一つには、戦争の記憶をいわば物質化してみせてくれる戦争博物館、資料館といった施設です。とくにそうした施設がいわゆる「記憶の場所」、つまり広島、長崎、沖縄、

南京、アウシュビッツのような、戦争や虐殺があったまさにその場所に作られているような場合には、その場所に自分も立ってみてかつての事件に思いを馳せることが、私たちの想像力を大いに刺激してくれます。単なる知識を超えた何者かが経験できるように思えるのです。ix

なお、頻出する site、place、location は文脈に応じて遺跡、場所、サイト、位置、立地などと訳し分け、authenticity は「真正性」、authentic は「本物の」「真正な」と文脈に応じて訳した。また、tourist は長谷政弘編 (1997)『観光学辞典』同文館出版の玉村和彦の説明に従い「観光者」の訳をあてた。なお、原文にしたがってユダヤ人迫害は「ショアー」、ホロコースト記念館は「ヤド・ヴァシェム」と訳している。

## 2. 翻訳

### 序論

#### 教育的ダーク・ツーリズム

「ダーク・ツーリズム」—死や災害に関わる場所へのツーリズム(Lennon & Foley, 2000; Seaton, 1996)は、新しい現象ではない。戦場、墓地、自然災害の起きた場所には昔から観光客が集まってきた(Ashworth & Hartman, 2005; Timothy & Boyd, 2002)。近年はダーク・ツーリズムに研究者の関心が強まっている。研究が進展するなか、重要な要素のひとつとされてきたのが、立地の真正性(authenticity of location)である (Belhassen, Caton, & Stewart, 2008; Miles, 2002; Tumarkin, 2005)。災害が実際に起きた場所は、もとの位置にある (in situ) あるいは一次的な場所(primary site)と呼ばれ、異なる位置に建てられた記念館や博物館は二次的な、創造された場所と呼ばれてきた(Lennon & Foley, 2000; Wight, 2006; Wight & Lennon, 2007)。

本稿では、こうした対比はダーク・ツーリズム体験の真正性を正確にとらえるには単純すぎるこ

とを論証する。私は、災厄を受けた人々の語りを体現し強調する場所を表す新しい用語、「人々のなかの」(*in populo*)を提案する。こうした場所は、被害者が多数住む場所や精神的な中心地に立地し、追悼される出来事〔が実際に起きた場所から(補: 訳者)の距離は関係がない。「人々のなかの」(*in populo*)の概念は、ヘリテージ・ツーリズム研究やダーク・ツーリズム研究における理論的な欠落に対応する。リー(2003: 250)が示唆した通り、「真正性のモデルに人物に基づく分類区分を進展させる必要がある。…だから真正性は、環境的な体験で、人々にもとづく体験でも、また両者の総合作用による場合でも、獲得できると論じられる」のだ。

本稿では、教育的ダーク・ツーリズムの事例を用いて、人々のなかにある(*in populo*)ダーク・ツーリズム・サイトで感受される真正性を探求する。取り上げるのは、イスラエルのエルサレムにあるヤド・ヴァシエム(Yad Vashem)、すなわちホロコースト殉教者英雄記念局(Holocaust Martyrs' and Heroes' Remembrance Authority)の国際ホロコースト研究所(International School for Holocaust studies)が主催した、ヨーロッパ人教師のためのセミナーである。この事例により、真正で意味があると気づくダーク・ツーリズム体験は、人々のなかの遺跡(*in populo site*)と呼べる場所で被害者と交流することで得られ、実際に事件が起きた場所から物理的に離れていようと関係ないことを論証する。さらに、このセミナー・ツアーのもつ明らかに教育的な性質の影響も調査した。

これらの人々は観光者全体からみればごく特定の一部にすぎないが、にもかかわらず、これらの人々を取り上げるのは、ヤド・ヴァシエムでの体験に対する彼らの反応が文書化されており、それが人々のなかの遺跡(*in populo site*)の現象を理解するうえで示唆に富むからだ。ヤド・ヴァシエムを訪問する他の集団、たとえばイスラエル国籍

のユダヤ教徒(Auron, 2008; Cohen, 2009; Krakover, 2005)、外国籍のユダヤ人(Cohen, 2008a)、イスラエル国籍のアラブ人(Krakover, 2005; Shoham, Shiloah, & Kalisman, 2003)は、明らかに、ヤド・ヴァシエムで提示される問題や解釈に対して、それぞれに特徴的な関係や認識を持っているが、これらの人々には今回言及しない。

本稿では、研究対象集団からヤド・ヴァシエムが、ホロコーストについて学べる真正な場所と認識されていることを示す。これ以降、「ホロコースト」ではなく、ヘブライ語の「ショアー」を用いるが、それは「ホロコースト」の語源がギリシャ語で宗教的犠牲を意味し(Petrie, 2009)、多数の大惨事を指すのに使われている(Gerstenfeld, 2008)ので、ナチス時代の大量殺戮を「ホロコースト」と呼ぶのは問題があるからだ。一方、ショアーは明確にナチスによる大量殺戮を指す言葉である。

### 教育的ダーク・ツーリズムにおける真正性

調査対象集団のヤド・ヴァシエムでの体験を議論するにあたって、とくに観光に関わる真正性の性質に関する研究を参考にした(Cohen, 2008b; Golomb, 1995; Selwyn, 1996)。この分野の先駆者であるマキヤーネル(1976)は、現代の観光において真正性の追求が重要な動機となっていると述べている。ブルーナー(1991)は、マキヤーネルの研究を拡張して、「真正な」文化との邂逅を通じた旅行者の自己変革願望を描き、ガラニ＝ムタフィ(2000)は、ツーリストが《他者》と交流する際に生じる自己発見の過程を探求した<sup>x</sup>。ピアースとモスカルド(1986)は、ツアーへの満足は旅行者の真正性の探求と結びついていることを発見した。このように、真正性は旅行者の多様な体験を説明するのに用いられてきた。そこで、何人かの研究者が、この用語の意味を明確化しようとしてきた。セルウィン(1996)は対象や経験についての認知的知識に関わる「クール」な真正性と、感情的な体験を指す「ホット」な真正性とを区別した。同様

に、ワン(1999)は、客観的な真正性（例えば博物館の遺物）と、象徴的な真正性（社会的に構築された、真正性の象徴）、そして実存の真正性（旅行者に真正な存在感覚を与えるもの）を区別している。別の見地から、アンドリオティス(2009)は、真正性の5つの中核的要素を定義した。すなわち精神的、文化的、環境的、現世的、教育的の5つである。

こうした真正性を定義しようとする試みにもかかわらず、真正性は融通無碍な(elastic)概念のままである。旅行者の真正性の感じ方は、彼らの社会的アイデンティティの影響を受ける(Cohen, 1988; Sedmak & Mihalič, 2008; Timothy & Boyd, 2002)。真正性を主観的なものと見なす限り、個人によって場所(place)や活動の真正性の感じ方は異なりうる。ある経験や場所(site)に真正性が存在すると信じることで体が彼らの体験を正確に表現している(Cohen, 2008b; Golomb, 1995)。コーエン(1979)の旅行者の類型化にしたがえば、目的地(destination site)が旅行者の精神的な中心にどれほど近いかは、その場所の真正性や意味の認識を左右する。同じ場所でも、追悼される事件への旅行者の心理的、感情的な思い入れの度合いに応じて、体験は異なるだろう。被害者となつた旅行者と、加害者や傍観者となつた旅行者とは直接関係を持たない旅行者とでは、経験は異なるだろう(Ashworth & Tunbridge, 1996)。追悼された事件に感情的に深い思い入れを持つ旅行者にとって、ダーク・ツーリズムは単なる「意義深い」(meaningful)ものにとどまらない、「至高体験(peak experience)」一束の間の自己実現の瞬間(Maslow, 1971)、あるいは「フロー体験」一進行中の活動をする際に繰り返し発生する自己実現の瞬間(Cohen, 2008b; Csikszentmihalyi, 1990)を提供する。これらの体験は、ワン(1999)の実存の真正性と類似する。

位置(locational)の真正性の問題に戻ると、ある場所(site)の物理的、社会的な文脈が旅行者の

真正性の認知に影響する一方、一次的な場所(primary site)だから真正性が保証されわけでも、二次的な場所(secondary site)だから真正性が排除されるわけでもない。このことは特に注意しなければならない。一次的な場所(site)での模造や再現は、真正でないと感じさせてしまいがちである(Boorstin, 1964; MacCannell, 1973; Stone, 2006)。記念物を残虐行為が起きた場所に据える場合、そこに事件の歴史的、政治的、教育的な文脈づけや解釈を提示する自由はないだろう(Bollag, 1999; Taum, 2005; Wight & Lennon, 2007; Williams, 2004)。

歴史的遺物や生存者の証言が、博物館や記念館など二次的な場所で提示されれば、客観的に真正であると感じられるかもしれない(Reisinger & Steiner, 2006; Wang, 1999)。だが、歴史的に真正な場所を訪問したり、本物の遺物を眺めたりすれば、旅行者がおのずから起きた事件を理解する助けとなる体験ができるわけではない。コール(2000)は、記憶を保存する主たる手段として博物館での遺物展示が過度に強調されれば、過去から距離をとり、過去を客観視するリスクも内在していると述べている。

そのうえ、一次的な場所の、ひどく心をかき乱すような要素は、教育の目的には不適切である。たとえば、ルワンダの大量虐殺の記念施設は、埋葬されない人骨を保管し、血痕のついた石を展示している。これらは残虐行為を思い出させるものとして、ほぼ間違いなく最も真正である。しかし、生徒・学生や訪問外国人が案内されるのは、むしろキガリ追悼センターが一般的である。そこでは、文章、写真、証言記録、ビデオを用いた伝統的な博物館展示物が「普通だが、非常に質が高く感動的で雄弁な方法で提示され、なにか非常に異常で驚くべきこととの出会い」を提供している。(Caplan, 2007: 20)

ダーク・ツーリズムには、レクリエーションや娯楽の場所など、あらゆる種類の「暗闇の影」が

含まれるが (Stone, 2006; Strange & Kempa, 2003)、大半のダーク・ツーリズムは、個人的に意義あるツーリズム (personally meaningful tourism) が増加する傾向の一部である (Breathnach, 2006; Novelli, 2005; Stone & Sharpley, 2008)。ダーク・ツーリズムは、しばしば、旅行者のアイデンティティや遺産(heritage)に関わっている。例えば、アフリカ系アメリカ人による奴隷貿易のルート沿いの遺跡へのツーリズム(Bruner, 1996; Dann & Seaton, 2001; Essah, 2001)、自国に影響を及ぼし親戚が戦った戦場や戦争慰霊碑へのツーリズムである(Chronis, 2005; Kiesling, 2000; Slade, 2003; Williams, 2004; Winter, 2009)。大きな悲劇の影響を受けた人々にとって、記念碑は「記憶の遺跡」(sites of memory)であるかもしれない(Nora, 1998; Resnik, 2003; Winter, 1998)。

ダークな場所へのツアーをより意義深いものとし、また体験が真正だとの感覚を高めるために、しばしば教育的、遺産的、政治的、歴史的なメッセージが明示的、暗示的に含まれる(Baker, 2009; Caplan, 2007; Yoneyama, 1999)。教育的な側面が含まれているかどうかは、有意義なダーク・ツーリズムと、娯楽やのぞき趣味のそれとを区別するのに役立つだろう(Moscardo, 1996)。教育的な要素は観光者がより「注意深く」なるよう促し、それが今度はツアーへの満足度や意義深さの認知を増す。ダーク・ツーリズムの場所を訪ねる動機—特に、戦争や大量虐殺に関わる最もダークで感情的に不快な場所を訪問する動機は、社会学的要因と心理学的要因の複雑な結びつきを反映する(Coles & Timothy, 2004; Sharpley & Stone, 2009)。同様に社会学的要因は、異なるダーク・ツーリズムの場所で事件がどのように表現され解釈されるかに影響している。

### イスラエル、ヨーロッパ、アメリカ合衆国のショア遺跡における解釈

ショアに関わる場所は無数にあるが、それぞれに独自の表現・解釈のスタイルがある。さまざまな遺跡が、それぞれに特徴あるスタイルで、この最も暗い問題(=ショア)を提示している。これは、シートン(2001)が定義したダーク・ツーリズムの4つの利害集団—主題となるコミュニティ(subject community)、ホスト・コミュニティ(host community)、所有者(owner)、観光者(tourist)—の視点を反映している。シャープリーとストーン(2009: 112)が「ダーク・サイトでの解説は、潜在的な訪問者や訪問グループの感情を認め、それにこたえるやり方で、追悼すべきである」と述べて、利害集団としての観光者のニーズを強調したことを踏まえ、この論文では観光者の視点から場所を考察する。

エルサレムのヤド・ヴァシエムは、ショアに関する場所で最も訪問者の多い場所のひとつである。ヤド・ヴァシエムは、1953年にイスラエル国会の命令によって、ショアに関する記念博物館として、また継続的な研究・教育のための資料館として設立された。ヤド・ヴァシエム(およびゲットー闘争家博物館(Getto Fighters' Museum)などのイスラエルのほかの場所)は、他にそうした施設がない時代に、教育センターを設立し、ショアを記念しショアを文書で記録する先駆的な役割を果たした(Farago, 1982; Resnik, 2003)。博物館と書庫・収蔵庫には、オリジナルな文書や物品、生存者の証言の記録など、多くの一次資料が収められている。個人旅行者、グループツアー、学校の見学、会議、セミナーなどを受け入れている。ヤド・ヴァシエムの記念館と収蔵庫を作るために膨大な労力が投資され、ショアの研究や文書記録化の分野での国際的な評価につながった。

ヤド・ヴァシエムは、ショアに関する現代イスラエル人の社会的記憶を体現すると言ってよいだろう(Auron, 2008)。博物館のウェブサイトは、ここが「ユダヤの人々の、ホロコーストに関する生きた追悼」の場であると説明している。ヤド・

ヴァシエムでの解説は、ショアーを「破壊から贖罪」—祖国を離れて永続してきた迫害が独立国家イスラエルにユダヤ人が生き残ることで是正される、とみなす古典的なシオニストのテーマを表現している。半世紀の間に、ショアーやその被害者、生存者に対するイスラエル公衆の態度の変化を反映し、解説は変化を遂げてきた(Porat, 2004; Resnik, 2003)。当初の大量虐殺的な反セム主義への抵抗とイスラエル建国という結果を強調した初期の語りから、ショアーとイスラエルにいるその生存者の歴史に対するより細かく複雑な見方が生じてきた。ヤド・ヴァシエムは、歴史を擬人化し個人化する意図で構想され、ヨーロッパでのユダヤ人の暮らし、その破壊とショアー後のイスラエルでの暮らしの継続性を提示するとともに、被害者の個別性に特に重点をおいた。最近、ヤド・ヴァシエムでは、ショアーのより普遍的なテーマをより強調し、ショアーの問題を幅広い多様な背景を持った現代の若者や大人にとって適切なものとするプロジェクトが立ち上がっている(Yad Vashem, 2010)。ヨーロッパの教師のためのセミナーは、そうしたプロジェクトのひとつである。しかしながら、ヤド・ヴァシエムでは、未遂に終わった大量虐殺とユダヤ人のイスラエルでの存続—それはショアーの生存者を含むがそれには限定されない—とは、明確に結びつけられている。この見方が人々のなかの記念碑 (*in populo memorial*) の核心にある。このことは、ヤド・ヴァシエムのスタッフや教師によってさまざまなやり方で表明されており、セミナーに参加した非ユダヤ人ヨーロッパ人旅行者の体験に影響を与えている。

ヤド・ヴァシエムを去る際、観光者はイスラエル国家での現代ユダヤ人の生活を目にし、経験することができる。これは訪問の重要な側面である。ヤド・ヴァシエムでの解説を、ヨーロッパやアメリカのショアー関連遺跡へのツアーと対比してみよう。死の収容所などのヨーロッパの遺跡は「立

地の真正性」(locational authenticity)により最もダークな経験を提供する(Miles, 2002: 1177)。これは否定できない重要な側面である。ヨーロッパにあるショアー関連の場所へのユダヤ人の観光は一種の巡礼である(Kugelmass, 1994)。ポーランドの遺跡群への巡礼ツアーに参加するイスラエル人学生(基本的にその全員がヤド・ヴァシエムを以前訪れたことがある)が増えている(Cohen, 2009; Feldman, 2001, 2008; Vargen, 2008)。しかし、多くの東欧のショアー関連遺跡は、地元の非ユダヤ人の人々によって所有され、管理され、案内が行われている。彼らはショアー時代に対する自分たちの記憶や社会的表象と闘っているのも、彼らの遺跡との関係や彼らの歴史は不明確である。(Ashworth, 2002; Beech, 2000; Huener, 2001; Macdonald, 2006; Rosenthal, 1998)。東欧のショアー遺跡を訪問する観光者は、ユダヤ人の生活がもはや存在しない社会を体験する。それがショアーの問題の説明を特に困難にしている(Gruber, 2002; Hartmann, 2005)。マーカスは、収容所跡での記憶はショアーの記憶を保存するのに重要な役割を果たしているが、ショアーの教育の場として最も適切な場所とはいえない、と提起する。「追悼の場は、特に自らの固有の力、すなわち真正な(authentic) 遺物の残る真の歴史の場が持つ感情的な訴求力を活用すべきである。知的な学びの大半については、より適切なほかの状況に任せるべきである」(Marcuse, 2001: 391)。

さらに、ヨーロッパの一次遺跡では、旅行者がそこで起きた出来事を理解する手助けとなる必要な解説が提供されているとは限らない。たとえば、ウクライナのバビ・ヤール峡谷では1941年に10万人を超える人々(主にユダヤ人)がSSの訓練を受けたアインザッツグルッペン(移動虐殺部隊)の分隊に殺害されたが、この場所になんの追悼記念物もない(Epstein & Rosen, 1997)。この場所を訪問するツアーは、教育的なものではなく、この地域に住んだ人々、そこで殺された人々に対する

洞察はなんら与えない。

ユダヤ人数百万人が住むアメリカには、ショアーの追悼施設や博物館が数多く設立されており、ショアーの規模やその歴史的な文脈について旅行者に効果的かつ強烈に伝えている。合衆国のショアー博物館は、記録された証言、生存者による語り、生存者との対話、生存者自身あるいは生存者の子孫がガイドするツアーなど、人々のなかにある (*in populo*) 特徴を含んでいる場合がある (Saulny, 2009)。しかし、彼らが示す事件の解説はヤド・ヴァシェムでの解説とはことなる。実例としてアメリカのショアー博物館の数例を引き合いに出そう。ニューヨーク市のユダヤ博物館にはショアーに関連する膨大な展示があり、戦後アメリカでのユダヤ人の生活に光を当てている。近年では、ショアー後のユダヤ人の生活におけるイスラエルの役割についても言及され始めている。ワシントン DC の合衆国ホロコースト記念博物館(the United States Holocaust Memorial Museum)は、アメリカの民主主義の精神と他者の普遍的価値と権利を体現している(Flanzbaum, 1999)。ロサンゼルスホロコースト博物館の説明(2010)は、ヤド・ヴァシェムでの説明に比べて個人への注目は薄い。ウェブサイトには次のように書かれている。「ロサンゼルス ホロコースト博物館はホロコーストの歴史をできる限り客観的に説明しています。それゆえ、その展示ではできる限り多くのオリジナルな展示物を提示し、それぞれが持つ個々の物語を語らしめることができるようなやり方で展示しています。」この博物館では、ユダヤ人に加えて、ロマの人々、同性愛者、カトリック、障害者、そしてナチスに抵抗した人々など、ナチスの手で苦しんださまざまな人々の語りを提示している。

ヤド・ヴァシェムは、ショアーについての顕著に異なる学習アプローチを、意図的かつ明示的に提供している。その要因の一つは、ヤド・ヴァシェムでは、ショアーの被害者(主題となるコミュニティ)、イスラエル人(ホスト・コミュニティ)、

イスラエル国家(所有者)、そして博物館訪問者の大半を占める海外及びイスラエル国籍のユダヤ人観光者、これら4つの利害関係グループがアイデンティティに関連して結びついているからである。このようにヤド・ヴァシェムでの説明はユダヤ人の観点からなされており、語りは、被害者たちが自らの物語を語るというものである。今回の事例では、非ユダヤ人旅行者を扱うが、博物館での説明は主にショアーへの個人的なつながりを持っている人々に対して向けられている。たとえば、名前のホール(Hall of Names)には、家族のメンバーが被害者に関する個人的な情報を記録する場所がある。この論文で議論する連続セミナーのようなプログラムには、カリキュラムの一部としてイスラエル人と会うことが企画として含まれている。会う相手はショアーの生存者やその子孫だけに限らない。これらの要素がこの場所(ヤド・ヴァシェム)の人々のなかにある(*in populo*)の性格を示している。

## エルサレムのショアーを研究する 研究手法

2005年から2006年に、エルサレムのホロコースト国際研究所が主催する7日間から10日間の連続セミナーの参加者に対して調査を行った。調査では、基本的評価の側面と、プログラムの社会的な探求の側面とが並存していた。この論文では後者の側面を扱う。セミナーには、ヨーロッパショアー研究教師ネットワークの一員となることに興味を持つ300人を超える教師が参加した。セミナーにはワークショップ、講義、ヤド・ヴァシェム構内のツアー、博物館資料の利用に関する説明、エルサレムのツアー、イスラエル人ホストとの時間、余暇活動が含まれた。主題は、ヨーロッパにおけるショアーと反セム主義の歴史であった。セミナーでは第一次世界大戦後のヨーロッパ、とくに参加者の母国でのユダヤ人の生活に関する講義や討論があり、さらに現代イスラエルでのユダヤ

人の生活を（主にイスラエル人宅訪問やツアーを通じて）探訪し、イスラエル・パレスチナ紛争を論じた。

各セミナーの最後に参加者に6ヶ国語で書かれた質問票が配布された。14の異なるセミナーの参加者から、総計272件の質問票が回収された。これらはセミナープログラムの参加者全体をほぼ代表する。さらに参加者3人ずつ17のグループでの話し合いや、セミナー参加者15人に対して帰国後に電話でインタビューを行った。

調査に対する反応の研究・分析の過程で、エルサレムでのセミナーの場所が彼らの経験の鍵となる特徴であることが、次第に明らかになった。特に、(インタビュー、観察、フォーカス・グループ<sup>xi</sup>などの) 質的調査によって、参加者にとっての場所の重要性が明らかになった。

### 調査対象人口

参加者の出身は12カ国以上(オーストリア、フィンランド、フランス、ドイツ、ギリシャ、リヒテンシュタイン、リトアニア、ノルウェー、ポーランド、ルーマニア、スロヴァキア、スウェーデン、イギリス)であった。参加者の大半は小学校や中学校の教師で、歴史、公民、宗教、文学、芸術などの担当で、半数以上がショアー研究を教えていた。さらに半数弱が博物館やショアー関連の場所への見学引率など、ショアーに関連するプロジェクトに関わっていた。教員免許を持つ人も、博士号を取得している人もいた。年齢は20歳から74歳までの幅があり(3分の2は30歳から50歳である)、約2対1で女性が男性より多かった。ユダヤ人の教師はほとんどいなかった。ショアーとの個人的なかわり方はさまざまであった。家族に被害者、加害者、また双方がいる場合もあれば、まったく家族でかわりのない人もいた。

### 結果

#### ダーク巡礼とオーセンティックな意味の探求

調査結果は、参加者が意味のあるダーク・ツーリズム体験を探し求めていたことを示している。それを見出したのがヤド・ヴァシェムでのセミナーであった。90%を超えるセミナー参加者がショアーの学習が世界の見方に影響を与えたと答え、半数以上が「全くその通り」と答えている。さらに、事実上すべての参加者がショアーは普遍的な意味があると同意した。これは、ヤド・ヴァシェム訪問が、参加者の家族が直接に特定の歴史的な出来事に関係しているだけでなく、広い、もっと基本的な問題の探求の一部でもある、ということを示している。

大半の参加者はプログラムの質に満足していた。大多数の参加者が、セミナーの結果、ショアーの歴史、ショアーやイスラエル、ユダヤ教を教える教育学、彼らの母国におけるショアーへの態度などの問題に対する理解が広がった、と語った。同時にそれは、感情的に困難だったとも感じていた。プログラムに「とても満足した」と回答した参加者は、プログラムが「全く」期待通りだった、と答え、「ぜひ」他の人に勧める、と述べたが、そうした参加者はほぼプログラムは感情的に困難だったと答えていた。言い換えれば、ヤド・ヴァシェムでの説明に感情的に揺り動かされた観光者ほど、プログラムから得たものが多いのである。

セミナー参加者への聞き取り調査では、彼らの多くがショアーに関連する個人的な問題と闘っていたり、教室でのショアーの否定や反セム主義の再出現、イスラエル国家を取り巻く論争、マイノリティの権利などの問題や、それに続く大量虐殺の事例の討論などで苦勞していた。事実上すべての参加者(各事例で95%を超える)が、第1次世界大戦で自国や自分達の上の世代がショアーにどのような役割を果たしたのか、自国でのユダヤ人、反セム主義の歴史、現在も続くイスラエル・パレスチナ紛争について学びたい、議論したいとの興味を示していた。4分の3を超える人がショアーの神学的意味について興味があった。

さまざまな国からの参加者が、セミナーに対して顕著に異なる反応を示した。彼らがショアーの問題に対してそれ以前にどのような情報に接してきたかを反映している。たとえば、フォーカス・グループでは、ドイツ人とオーストリア人の参加者の感情的な経験は、どちらの国もショアーの中心地だったにもかかわらず、根本的に違うことに注目した。ドイツ人の参加者は、ショアーに関して全国的に広く展開されているエントシュルディガング（謝罪／弁明）プログラムに以前参加したことがあり、それゆえこの問題に向き合う心構えができていた。興味深いのは、ポーランドは共産主義体制下でショアーについて公式には沈黙を保っているにもかかわらず、ポーランド人参加者が非常に高度な知識を事前に身に付けていたことである。著しく対照的なのはオーストリア人参加者だった。多くのオーストラリア人参加者は、自国や自分の親族の歴史の一部に明らかに初めて対峙することになり、はるかに感情的に苦しい経験をヤド・ヴァシェムで味わった。オーストラリア人フォーカス・グループの、あるオブザーバーは、多くの参加者が討論の際に泣き出し、体験によって「感情的に壊れた」ように見えた、と述べた。参加者の反応が示すのは、彼らが理解と、感情的に難しい問題—それは彼らの基本的な世界観の核心に近いところにある—に関連した意味のある経験を求めていたことだ。このことは、根本的な質問を提起する。つまり、非ユダヤ人ヨーロッパ人教師にとって、イスラエルのヤド・ヴァシェム・ショアー記念博物館への教育ツアーの重要性とは何か？である。

### 立地の真正性 (Authenticity of Location)

ショアーについてよく知っている外国人旅行者がヤド・ヴァシェムに行くことを選び、かつ体験に高い満足度を示している事実は、ヤド・ヴァシェムを正統で真正な場所であると認識していることを示している。質問票での評価やインタビューや

フォーカス・グループでの発言は、被害者や被害者の子孫とつながったものとしてショアーを学ぶ特別な機会をヤド・ヴァシェムのセミナーが提供していることを示している。参加者のなかには、以前に強制収容所を訪問した人もいた。(一人はそうした場所へのツアーを企画する組織で働いてさえいた。)しかし、多くの人はヤド・ヴァシェム訪問が、とくにショアー以前と以後のユダヤ人の暮らしについて学ぶことができた点で、ショアーの理解を広げたと述べた。

ヤド・ヴァシェムでのセミナーの日程とカリキュラムには、人々のなかの遺跡 (*in populo site*) の概念を説明する好例となる活動が多く含まれている。参加者はショアーの生存者に会い、彼らの証言を聴き、イスラエルとエルサレムを旅し、現代イスラエル社会におけるショアーの役割に関するワークショップに参加した。

参加者は、セミナーのプログラムの改善方法を提案するよう求められた。最も多かったのは、ショアーの生存者や彼らの直接の子孫だけでなく、一般のイスラエル人との出会いを多くするという提案だった。参加者の約3分の2がそうした出会いを増やすことを要求した。次に多かったのが、エルサレムやイスラエル国内の旅を増やすという要求だった。これらの提案は、イスラエルという国やその国民についてもっと学ぶことによって学習の経験が進むだろうと参加者が感じていることを示している。エルサレムでセミナーを開催するという状況の特殊性、エルサレムでセミナーを開催することの価値は、ディスカッショングループやインタビューで何度も繰り返して強調された。多くの参加者が、戦争後のユダヤ人の生活を見ることが、ショアーについて教育する社会的、歴史的な文脈を理解することの重要な側面であると述べていた。彼らは、イスラエル人との出会いやイスラエル社会との交流を、ショアー学習の不可分の一部であると認識していた。

ヤド・ヴァシェムのキャンパスか、イスラエル

でしかできない活動を強調するべきだと意見を寄せた参加者もいた。たとえば、いくつかのディスカッショングループで、イスラエル人教師との出会いやイスラエルの学校への訪問を企画できるのではないかと、そうすればヨーロッパ人教師がイスラエルの学校でショアーがどう教えられているか学ぶことができる、との意見が出た。ポーランド人参加者のフォーカス・グループでは、イスラエル国内のショアー記念物を見るだけでも一つたりショアーがどのように説明され、どのような絵や図が含まれているか、を見るだけでもそれ自体が参考になる、と述べていた。フィンランド人参加者のグループ討論では、ヤド・ヴァシェムの展示では、有刺鉄線の囲いの向こうの囚人というだけの描写よりも、ショアー以前のヨーロッパでのユダヤ人の暮らしの豊かさについての展示が重要だと述べていた。イギリスからのグループの議論では、ヤド・ヴァシェムのツアーの一部として現在のユダヤ人の生活を見ることが、ある参加者の言葉を借りれば、「ヒトラーは勝たなかった、と本当に知るために」、重要だとされた。この引用は、多くのツアー参加者の回答や反応を簡潔にまとめている。

ショアー生存者の証言は、セミナーの特に強力な側面として言及された。ヤド・ヴァシェムの職員との交流は体験の中心的部分として注目され、教師はヨーロッパ帰国後も連絡をとりつづけたいと希望を表明していた。

ショアーの歴史に触れ、ショアーの歴史を教えるという教育的な問題に触れたことに加え、セミナーの参加者は、ユダヤ人のアイデンティティとイスラエル社会に対する理解が深まったと報告している。インタビューやフォーカス・グループの結果が示す通り、イスラエルにきたという事実そのものが、参加者のショアーに対する理解を深め、あるオーストリア人参加者が典型だが、ある種の良心の呵責にさえなった人々もいた。彼女の良心はナチスの支持者で、これまで彼女にはイ

スラエルに行かせようとしなかった。それゆえ、エルサレムでのセミナーは彼女のショアーの個人史に関わる強烈な経験であった。ヨーロッパの場所の訪問ではそれほどの重大さはなかっただろう。

## 考察

### *立地の真正性 (Authenticity of Place) : もともと の位置にある (In Situ) と人々のなかの (In Populo) 記念遺跡*

ホスト・コミュニティ、主題となるコミュニティ、所有者のアイデンティティが繋がっていることが、ヤド・ヴァシェムの重要な構成要素である。それはヤド・ヴァシェムを他のショアーの記念館と違うものにし、ユダヤ人、非ユダヤ人を問わず観光者の体験に影響を及ぼしている。彼らが繰り返して述べているとおり、現代イスラエルのユダヤ人社会と出会うことによって、ナチ体制の最終的な解決（大量殺戮）が最終的には失敗したことを想起し気分が安らぐ。第2次世界大戦に参加した国々からの参加者、特に親族がそれに直接関わった参加者にとって、イスラエルへの旅はショアーというテーマに接近することを可能にする。その一方、自国で対峙するような問題からは一定の距離を取れる。参加者が自国の果たした役割の現実を無視しようとしていると言うのではない。すでに述べた通り、事実上すべての参加者が、戦前に自国に住んでいたユダヤ人について学ぶこと、戦争中の自国の役割について議論すること、戦争中およびショアーの間の自国の前世代の人々の役割について扱うことは大事だ、と同意している。彼らのコメントは、ヤド・ヴァシェムのスタッフが提供するような、他者との交流を通じて自己を変形するような旅行体験を求めていることを示している (Bruner, 1991; Galani-Moutafi, 2000)。場所に内在する特徴とガイディングに加えて、ヤド・ヴァシェムでの体験の真正性の認識は、旅行者の社会化と、自国でショアーの問題に事前に接していることに影響を受けている (Ashworth &

Tunbridge, 1996; Cohen, 1988; Sedmak & Mihalič, 2008; Timothy & Boyd, 2002; Wang, 1999)。

セミナーに参加した旅行者は、深い教育上の経歴があり、個人的にも専門的にもショアーの問題に関心を持っていた。それゆえ、彼らはモスカルド(1996)が詳述した心の集中 (mindfulness)の 3つの基準の 2つ、つまり、そのテーマに関する興味関心が高いこと、教育的な動機が高いことを体現している (3番目の基準である、疲れの度合いが低い、は外国人観光者の場合は問題になるかもしれない)。モスカルド(1996: 382)は、「気配りができる状態の訪問者は、思慮のない訪問者に比べて、訪問を楽しむ度合いが高く、訪問により高い満足を示す。訪問から得るものも多く、その話題や場所についてもっと理解することに興味を持つ」ことを発見した。

同様に、旅行者の体験に関するコーエンの分類(1979: 192)を用いると、教育的ダーク・ツーリズムに参加した、これらの観光者は、レクリエーション的でも陽動的 (注意をそらす) でもない。彼らは主に体験的であり、存在論的で、深く有意義な体験を求めている。また、真正性を感情的な体験と説明したセルウィン(1996)にしたがえば、ヤド・ヴァシェムのセミナー参加者の非常に感情的な体験は真正である。セミナーに参加した旅行者が、継続してショアー研究に携わっていることを考えると、ヤド・ヴァシェムのセミナーは、ピーク体験(Cohen, 2008b; Maslow, 1971)やフロー体験(Cohen, 2008b; Csikszentmihalyi, 1990)の役割を果たしたといえる。それは、ショアーおよびショアーと個人的、社会的アイデンティティの関係を継続して探求するなかの、困難だがやりがいがあり、魅力のある、決定的な瞬間だったといえよう。

その一方で、ヤド・ヴァシェムでのショアー学習の真正性の認識を、純粋に主観的なものとしてみるべきではない。「空間的なものと、社会的なる

ものという概念は、どちらも旅行者の内面的な数々の体験を仲裁する上で非常に意味がある」がゆえに、ヤド・ヴァシェムのスタッフは、「意味を染み込ませるのに役立つ」真実の「社会的、政治的文脈に」ツアーを位置づけている (Belhassen et al., 2008: 685)。これは、現在ほとんどユダヤ人が住んでいないヨーロッパの都市にある「ユダヤ人」の場所として売り出されている場所とは、対照的である(Gruber, 2002; Hartmann, 2005)。

参加者がセミナーに高い満足を示し、期待通りだったと感じたという事実は、彼らが真正な体験と理解したことを示している。セミナーの参加者は、ヤド・ヴァシェムを特定して、すでに大幅に学んだショアーの知識をさらに深め、それまでの教育やヨーロッパでのダーク・ツーリズムの経験を補いたいと、意識的な決定をしている。体験はさまざまな度合いで、アンドリオティス(2009)が指摘した真正性の中核要素、すなわち精神的要素 (さまざまな宗教にとっての聖地を訪ねること)、文化的要素 (イスラエル人と会い、イスラエル社会を体感することを通じて)、環境的要素 (イスラエル国内旅行)、世俗的要素 (この分野の他の教師との社会化)、教育的要素 (セミナー) のそれぞれに関連している。

## 結論

このケースは、人々のなかの遺跡 (*in populo site*) で人物にもとづく体験と環境にもとづく体験の相互作用を通して、意味がどのように伝達されるかの一例である。この研究の結果は、ヤド・ヴァシェムをヨーロッパ人旅行者がショアーの学習にとって正真正銘の場所と受け取っていることを示している。ヤド・ヴァシェムを「二次的」な場所(*secondary site*)と定義してしまうと、意識やアイデンティティに関するその性質を、正確に描写することができない。悲劇が起きた場所からの地理的な距離が、教育的ダーク・ツーリズムの体験を弱めることはなかった。旅行者はヤド・ヴァシ

ェム・セミナーを、感情的には困難でも、意義あるものと感じており、イスラエル国内に位置していることが重要な要素である、と感じていることが、質問票やフォーカス・グループへの回答から分かる。ヤド・ヴァシェムで利用できるスタッフとリソースがダーク・ツーリズム体験を高度に教育的なものとしている。主題のさまざまな側面に対する参加者の認識理解は感情的な体験とともに顕著に改善した。

ヤド・ヴァシェムは、その教育学的なアプローチとその位置ゆえに、たとえば、生存者の証言やイスラエルに現在住む生存者に関する展示を通じて、現在まで続くショアーの意味を生き生きと見せる。旅行者は、イスラエル人に会いたい、イスラエル社会を見たいという興味を持ち、こうした出会いと学習体験がつながっていると認識しているが、こうした興味や認識は、ヤド・ヴァシェムの職員とセミナープログラムによって強化された。旅行者が生存者や生存者の子孫、あるいは被害を受けた人々と交流できるようにすることによって、この人々のなかの遺跡 (*in populo site*) では、かつての死のキャンプの場で提示されるショアーの問題との出会いとは異なる出会いを提供している。被害を受けた人々との出会いは、旅行に倫理的な要素を加える。ヤド・ヴァシェムのセミナー参加者は、ショアーという事件を理解したい、そして償いさえしたいとの探求の一部として、ユダヤ系イスラエル人と会いたいと述べていた。

ダーク・ツーリズムには、教育的、倫理的な考慮を含めようとする流れがあるかもしれない。第1次世界大戦の戦場への観光の研究のなかで、ウィンター (2009) は、ダーク・ツーリズムの解釈や訪問の動機が、時間がたつにつれて、死者の追悼を基本とするものから、歴史的な出来事について教育することや、より大きな倫理的な問いについて触れることさえも含めたものへと展開し、幅が広がってきたことを明らかにしている。ライトとレノン(2007)は、「倫理的、精神的な二分法に対

処すること」が、ダーク・ツーリズムの場所での意味ある説明、とくに賛否の分かれる政治的な意味あいを作り出すうえで重要である。特に、ショアーに関連したツーリズムは、解釈と提示に関する無数の倫理的な問いを投げかける。この点については、この論文の視野の中で十分に扱うことはできないが、セミナー参加者のコメントは、彼らがこの問題の倫理的、道義的な側面を探求することに興味を持っていることを示している。

### もともとの位置にある遺跡 (*In Situ site*) と人々のなかの遺跡 (*In Populo site*) の相互作用

セミナー参加者の多く—そしてイスラエルのショアー記念遺跡を訪れる観光者—は、ヨーロッパの遺跡を以前訪れたことがあるか、イスラエルの場所を訪問した後でヨーロッパの遺跡も訪問している。人々のなかの遺跡 (*in populo site*) への訪問と、もともとの位置にある遺跡 (*in situ site*) への訪問の相互作用は、将来の研究の進む方向として興味深い。意図的にヨーロッパのショアー遺跡とイスラエルのショアー記念物の訪問を並べるツアーが多数存在する (Cohen, 2008, 2009; Vargen, 2008)。二種類の遺跡を訪問することの相互作用 (さらに異国での経験の全体) は、イスラエル、ユダヤ人アイデンティティ、ショアーに対する認識に特別の意味をもつ (Cohen, 2008, 2009; Kelner, 2008)。

人々のなかの遺跡 (*in populo site*) ともともとの位置にある遺跡 (*in situ site*) の相互作用はダーク・ツーリズムのなかでより広く見られる現象になるだろう。というのも、迫害の地を離れた被害者は、彼らの文化と歴史的経験の記憶を保存するために、博物館や展示を設立する。例えば、アルメニア人もカンボジア人も大量殺人の記念館を遺産巡礼の一部として訪問する (Kiesling, 2000)。さらに、これらの国々を出身地とする移民や難民で、政治的あるいは経済的制約によって現地の記念施設を訪問できなかった人々は、記念式典を行

い、他の場所に記念博物館を建設してきた(Totten, 2005; Williams, 2004)。難民によって創立された記念博物館は、生存者の証言や記憶が収集されており、人々の思念の中にある人々のなかの (*in populo*) 記憶の例を代表するものだといえる。

将来の研究にとって興味深い手段は、人々のなかの遺跡 (*in populo site*) の他の事例で悲劇を記憶している地元の人々に旅行者がどの程度会いたいと思う、あるいは会おうと努力すると表明するかを解明することである。例えば、1997年にニューヨーク近代美術館でポルポト政権下のカンボジアでの大量殺戮の被害者の写真の展覧会が行われた。これはいわば一時的なダーク・ツーリズムの場であったのだが、展示会を見た人のなかに、クメール系アメリカ人やカンボジア系アメリカ人が展示会に関わることによって、展示会がより意義深く、写真をより文脈化することができたのではないか、と感想を寄せた人々もいた(Hughes, 2003)。

エルサレムのヤド・ヴァシェムでショアーを学んだヨーロッパ人教師の調査結果が示すのは、実際に悲劇が起きた場所から遠くても、追悼される悲劇を体験した人々と結びついている場所にある祈念館の重要性、妥当性である。この研究は、対象集団に属していない人々（つまり非ユダヤ人旅行者）にとってさえも、イスラエルでのショアー学習には特有の重要性が内在することを示している。今後の研究では、離散ユダヤ人とユダヤ系イスラエル人がヤド・ヴァシェムやイスラエル国内の同様の場所への訪問をどのように受け止めているか、ヨーロッパのサイトでの体験と比較検討することになる。これにより、他のダーク・ツーリズム事例における人々のなかの (*in populo*) の記念物の概念の理論的基礎も提供する。

## 謝辞

コーエン女史 (Einat Bar-On Cohen) には草稿にいただいた所見・示唆に対して、オフアナンス

キー女史 (Allison Ofanansky) には編集の労に対して感謝申し上げる。また、査読者から頂いたためになる建設的批判には心からの感謝を表したい。ヤド・ヴァシェムヨーロッパ人教師のためのホロコースト研究セミナー国際学校のスタッフには本研究への継続的支援に、本誌の匿名査読者には草稿の改善の助けとなった所見と示唆に、Allison Ofanansky と Ruth Rossing にはテキスト編集への協力に感謝を申し上げる。

## 参考文献

- Andriotis, K. (2009). Sacred site experience: A phenomenological study. *Annals of Tourism Research*, 36(1), 64–84.
- Ashworth, G. (2002). Holocaust tourism: The experience of Kraków-Kazimierz. *International Research in Geographical and Environmental Education*, 11(4), 363–367.
- Ashworth, G., & Hartman, R. (2005). *Horror and human tragedy revisited*. New York: Cognizant.
- Ashworth, G., & Tunbridge, J. (1996). *Dissonant heritage: The resource in conflict*. New York: Wiley.
- Auron, Y. (2008). The Holocaust: A central factor in the Jewish-Israeli identity. In E. H. Cohen (Ed.), *Jewish identity, values and leisure of Israeli youth* (pp. 153–160). Tel Aviv, Israel: The Kelman Center, School of Education, Tel Aviv University, [in Hebrew].
- Baker, P. (2009). Obama delivers call for change to a rapt Africa. In *New York Times* 11 July 2009. New York: New York Times. <[http://www.nytimes.com/2009/07/12/world/africa/12prexy.html?\\_r=1&hpw](http://www.nytimes.com/2009/07/12/world/africa/12prexy.html?_r=1&hpw)>.
- Beech, J. (2000). The enigma of Holocaust sites

- as tourist attractions: The case of Buchenwald. *Managing Leisure*, 5(1), 29–41.
- Belhassen, Y., Caton, K., & Stewart, W. (2008). The search for authenticity in the pilgrim experience. *Annals of Tourism Research*, 35(3), 668–689.
- Bollag, B. (1999). In the shadow of Auschwitz: Teaching the Holocaust in Poland. *American Educator*, 23(1), 38–49.
- Boorstin, D. (1964). *The image: A guide to pseudo-events in America*. New York: Harper & Row.
- Breathnach, T. (2006). Looking for the real me: Locating the self in heritage tourism. *Journal of Heritage Tourism*, 1(2), 100–120.
- Bruner, E. (1991). Transformation of self in tourism. *Annals of Tourism Research*, 18(2), 238–250.
- Bruner, E. (1996). Tourism in Ghana: The representation of slavery and the return of the Black diaspora. *American Anthropologist*, 98(2), 290–304.
- Caplan, P. (2007). ‘Never again’: Genocide memorials in Rwanda. *Anthropology Today*, 23(1), 20–22.
- Chronis, A. (2005). Co-constructing heritage at the Gettysburg storyscape. *Annals of Tourism Research*, 32(2), 386–406.
- Cohen, E. (1979). A phenomenology of tourist experiences. *Sociology*, 13(2), 179–201.
- Cohen, E. (1988). Authenticity and commoditization in tourism. *Annals of Tourism Research*, 15, 371–386.
- Cohen, E. H. (2008a). Youth tourism to Israel: Educational experiences of the diaspora. Clevedon, UK: Channel View Publications.
- Cohen, S. (2008b). Know thyself? Assimilating the classical leisure ideal, selfactualisation, flow experience and existential authenticity. In P. Gilchrist & B. Wheaton (Eds.), *Whatever happened to the leisure society? Theory, debate and policy* (pp. 165–180). Eastbourne: Leisure Studies Association.
- Cohen, E. H. (2009). Shoah education in Israeli state schools: An educational research 2007–2009. Ramat Gan: Bar Ilan University.
- Cole, T. (2000). *Selling the Holocaust, from Auschwitz to Schindler: How history is bought, packaged and sold*. London: Routledge.
- Coles, T., & Timothy, D. (Eds.). (2004). *Tourism, diasporas and space*. London: Routledge.
- Csikszentmihalyi, M. (1990). *Flow: The psychology of optimal experience*. New York: Harper Collins.
- Dann, G., & Seaton, A. (2001). *Slavery, contested heritage and thanatourism*. London: Routledge.
- Epstein, E., & Rosen, P. (1997). *Dictionary of the Holocaust: Biography, geography and terminology*. Westport, CT: Greenwood Publishing Group.
- Essah, P. (2001). Slavery, heritage and tourism in Ghana. *International Journal of Hospitality & Tourism Administration*, 2(3 & 4), 31–49.
- Farago, U. (1982). A summary of Holocaust education in Israel. Haifa: University of Haifa, [Hebrew].
- Flanzbaum, H. (Ed.). (1999). *The Americanization of the holocaust*.

- Baltimore, MD: Johns Hopkins University.
- Feldman, J. (2001). In the footsteps of the Israeli Holocaust Survivor: Israeli youth pilgrimages to Poland, Shoah memory and national identity. In P. Daly, et al. (Eds.), *Building History: The Shoah in Art, Memory, and Myth*. McGill European Studies Series (Vol. 4, pp. 35–63). New York: Peter Lang.
- Feldman, J. (2008). *Above the death pits, beneath the flag: Youth voyages to Poland and the performance of Israeli national identity*. Oxford, New York: Berghahn Books.
- Galani-Moutafi, V. (2000). The self and the other: Traveler, ethnographer, tourist. *Annals of Tourism Research*, 27(1), 203–224.
- Gerstenfeld, M. (2008). Institute for Global Jewish Affairs. Holocaust trivialization. <[http://www.jcpa.org/JCPA/Templates/ShowPage.asp?DRIT=3&DBID=1&LNGID=1&TMID=111&FID=624&PID=0&IID=2199&TTL=Holocaust\\_Trivialization](http://www.jcpa.org/JCPA/Templates/ShowPage.asp?DRIT=3&DBID=1&LNGID=1&TMID=111&FID=624&PID=0&IID=2199&TTL=Holocaust_Trivialization)>.
- Golomb, J. (1995). *In search of authenticity: From Kierkegaard to Camus*. London: Routledge.
- Gruber, R. (2002). *Virtually Jewish: Reinventing Jewish culture in Europe*. University of California Press.
- Hartmann, R. (2005). Holocaust memorials without Holocaust survivors: The management of museums and memorials to victims of Nazi Germany in 21<sup>st</sup> century Europe. In G. Ashworth & R. Hartman (Eds.), *Horror and human tragedy revisited* (pp. 89–107). New York: Cognizant.
- Huener, J. (2001). Antifascist pilgrimage and rehabilitation at Auschwitz: The political tourism of Aktion Sühnezeichen and Sozialistische Jugend. *German Studies Review*, 24(3), 513–532.
- Hughes, R. (2003). The abject artefacts of memory: Photographs from Cambodia's genocide. *Media, Culture & Society*, 25, 23–44. Reprinted in M. Abbas & J. Erni (Eds.), *Internationalizing cultural studies: An anthology* (pp. 454–467). New York, London: Wiley-Blackwell.
- Kelner, S. (2008). Jewish educational travel. In R. Goodman, P. Flexner, & L. Bloomberg (Eds.), *What we now know about Jewish education* (pp. 423–432). Los Angeles, CA: Torah Aura.
- Kiesling, B. (2000). *Rediscovering Armenia: An archaeological/touristic gazetteer and map set for the historical monuments of Armenia*. Washington, DC: Yerevan. <<http://66.102.1.104/scholar?q=cache:9z7R2TicsEJ:scholar.google.com/+Armenian+dispora,+tourism+to+Armenia&hl=en>>.
- Krakover, S. (2005). Attitudes of Israeli visitors towards the Holocaust remembrance site of Vad Yashem. In G. Ashworth & R. Hartmann (Eds.), *Horror and human tragedy revisited: The management of sites of atrocities for tourism* (pp. 108–117). New York: Cognizant.
- Kugelmass, J. (1994). Why we go to Poland: Holocaust tourism as secular ritual. In J. Young (Ed.), *The art of memory: Holocaust memorials in history* (pp. 174–184). Washington, DC: Prestel.
- Lennon, J., & Foley, M. (2000). *Dark tourism: The attraction of death and disaster*.

- London, NY: Continuum.
- Li, Y. (2003). Heritage tourism: The contradictions between conservation and change. *Tourism and Hospitality Research*, 4(3), 247–261.
- Los Angeles Museum of the Holocaust. (2010). Museum Themes. <<http://www.lamoth.org/exhibitions/museum-themes/>>. Sourced 16.6.10.
- MacCannell, D. (1973). Staged authenticity: Arrangements of social space in tourist settings. *American Journal of Sociology*, 79(3), 589–603.
- MacCannell, D. (1976). *The tourist: A new theory of the leisure class*. New York: Schocken Books.
- Macdonald, S. (2006). Mediating heritage: Tour guides at the former Nazi party rally grounds, Nuremberg. *Tourist Studies*, 6(2), 119–138.
- Marcuse, H. (2001). *Legacies of Dachau: The uses and abuses of a concentration camp, 1933–2001*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Maslow, A. (1971). *The farther reaches of human nature*. Middlesex: Penguin Books.
- Miles, W. (2002). Auschwitz: Museum interpretation and darker tourism. *Annals of Tourism Research*, 29(4), 1175–1178.
- Moscardo, G. (1996). Mindful visitors: Heritage and tourism. *Annals of Tourism Research*, 23, 376–397.
- Novelli, M. (Ed.). (2005). *Niche tourism: Contemporary issues, trends and cases*. NY and London: Butterworth-Heinemann.
- Nora, P. (1998). *Realms of memory*. New York: Columbia University Press. [Originally published in French as *Les lieux de me´moire Paris: Gallimard (1984–1992)*].
- Pearce, P., & Moscardo, G. (1986). The concept of authenticity in tourist experiences. *Journal of Sociology*, 22(1), 121–132.
- Petrie, J. (2009). Berkeley Internet. The secular word “holocaust”: Scholarly sacralization, twentieth century meanings. <<http://www.berkeleyinternet.com/holocaust/>>.
- Porat, D. (2004). From the scandal to the Holocaust in Israeli education. *Journal of Contemporary History*, 39(4), 619–636.
- Reisinger, Y., & Steiner, C. (2006). Reconceptualizing object authenticity. *Annals of Tourism Research*, 33(1), 65–86.
- Resnik, J. (2003). ‘Sites of memory’ of the holocaust: Shaping national memory in the education system in Israel. *Nations and Nationalism*, 9(2), 297–317.
- Rosenthal, G. (1998). *The holocaust in three generations: Families of victims and perpetrators of the Nazi regime*. London and Washington: Cassell.
- Saulny, S. (2009). Holocaust museum lets local voices memorialize. In *New York Times* 18 April 2009.
- Seaton, A. (1996). Guided by the dark: From thanatopsis to thanatourism. *International Journal of Heritage Studies*, 2(4), 234–244.
- Seaton, A. (2001). Sources of slavery—destinations of slavery: The silences and disclosures of slavery heritage in the UK and US. In G. Dann & A. Seaton (Eds.), *Slavery, contested heritage, and thanatourism* (pp. 107–162). Oxford: Routledge.

- Selwyn, T. (Ed.). (1996). *The tourist image: Myths and myth making in tourism*. Chichester: John Wiley & Sons.
- Sedmak, G., & Mihalič, T. (2008). Authenticity in mature seaside resorts. *Annals of Tourism Research*, 35(4), 1007–1031.
- Sharpley, R., & Stone, P. (2009). *The darker side of travel: The theory and practice of dark tourism*. Channel View Publications: Bristol.
- Shoham, E., Shiloah, N., & Kalisman, R. (2003). Arab teachers and Holocaust education: Arab teachers study Holocaust education in Israel. *Teaching and Teacher Education*, 19, 609–626.
- Slade, P. (2003). Gallipoli thanatourism: The meaning of ANZAC. *Annals of Tourism Research*, 30(4), 779–794.
- Stone, P. (2006). A dark tourism spectrum: Towards a typology of death and macabre related tourist sites, attractions and exhibitions. *Tourism: An Interdisciplinary International Journal*, 52(2), 145–160.
- Stone, P., & Sharpley, R. (2008). Consuming dark tourism: A thanatological perspective. *Annals of Tourism Research*, 35(2), 574–595.
- Strange, C., & Kempa, M. (2003). Shades of dark tourism: Alcatraz and Robben Island. *Annals of Tourism Research*, 30(2), 386–405.
- Taum, Y. (2005). Collective Cambodian memories of the Pol Pot Khmer Rouge regime. Paper Presented at the Fifth Annual Conference of the Asian Scholarship Foundation. Bangkok, July 25-26, 2005.
- Timothy, D., & Boyd, S. (2002). *Heritage tourism*. New Jersey: Pearson Education.
- Totten, S. (2005). Does history matter? Ask the Armenians. *Social Education*, 69(6), 328–332.
- Tumarkin, M. (2005). *Traumascapes: The power and fate of places transformed by tragedy*. Melbourne, Australia: Melbourne University Publishing.
- Vargen, Y. (2008). *Student journeys to Poland*. Jerusalem: The Knesset Center for Research and Information.
- Vashem, Yad. (2010). *Transmitting Holocaust Remembrance Worldwide: 2009 Annual Report*. Jerusalem: Yad Vashem.
- Wang, N. (1999). Rethinking authenticity in tourism experience. *Annals of Tourism Research*, 26(1999), 349–370.
- Wight, A. (2006). Philosophical and methodological praxes in dark tourism: Controversy, contention and the evolving paradigm. *Journal of Vacation Marketing*, 12(2), 119–129.
- Wight, A., & Lennon, J. (2007). Selective interpretation and eclectic human heritage in Lithuania. *Tourism Management*, 28(2), 519–529.
- Williams, P. (2004). Witnessing genocide: Vigilance and remembrance at Tuol Sleng and Choeung Ek. *Holocaust and Genocide Studies*, 18(2), 234–254.
- Winter, J. (1998). *Sites of memory, sites of mourning: The great war in European cultural history*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Winter, C. (2009). Tourism, social memory and the Great War. *Annals of Tourism Research*, 36(4), 607–626.
- Yoneyama, L. (1999). *Hiroshima traces: Time,*

space, and the dialectics of memory.  
Berkeley, CA: University of California  
Press.

---

<sup>i</sup> 原文は Holocaust Museum。他の箇所では the Shoah (Holocaust) memorial museum の表記もされているが、外務省の表記に従い「ホロコースト記念館」と訳した。なお、原著者が Holocaust の使用に問題があると判断しているため、文中でヘブライ語の Yad Vashem を使っている箇所は、そのままヤド・ヴァシエムと訳した。

<sup>ii</sup> 参考文献中に Cohen, E. と表記されている同姓同名の社会学者 Erik Cohen (エルサレム・ヘブライ大学社会科学部名誉教授) とは別人。

<sup>iii</sup> トマス・H・クック (聞き手/「本の話」編集部) 「父は本など読まぬひとだった」『本の話』2010年4月号、文芸春秋、URL:<http://www.bunshun.co.jp/jicho/1004thomas/index.htm>

<sup>iv</sup> <http://home.hiroshima-u.ac.jp/jsjgs/workinggroup/tourism/2008/20080723.html>

<sup>v</sup> [記憶と表現] 研究会 (2005) 『訪ねてみよう戦争を学ぶミュージアム/メモリアル』岩波ジュニア新書 510、岩波書店

<sup>vi</sup> 新崎盛暉ほか (2008) 『観光コースでない沖縄 戦跡・基地・産業・自然・先島』高文研

<sup>vii</sup> 「日本夕張市、悲しい「破産現場」観光」『中央日報/中央日報日本語版』(【時視各角】) 2010年07月16日15時01分 <http://japanese.joins.com/article/249/131249.html?sectcode=&servcode=>

<sup>viii</sup> 「pusan nikki ダークツーリズム」2010年12月04日 <http://dilbelau.hamazo.tv/e2380443.html>

<sup>ix</sup> 前掲 [記憶と表現] 研究会 (2005)、p.vi。

<sup>x</sup> 伊多波による解説と翻訳を参照。伊多波 (2012) 「『ツーリズム研究年報』所収論文・解説と翻訳「自己と《他者》—旅行者、民族誌家、ツーリスト」(ヴァジリキ・ガラニニムタフィ著) について」神戸夙川学院大学観光文化学部紀要 2、pp.18-36

<sup>xi</sup> 千年・阿部は先行研究を参照し、フォーカス・グループ・ディスカッションを次のように定義している。「あらかじめ選定された研究関心のテーマについて焦点が定まった議論をしてもらう目的のために、明確に定義された母集団から少人数の対象者を集めて行うディスカッション」(Knodel et al., 1990) (千年よしみ・阿部 彩「フォーカス・グループ・ディスカッションの手法と課題：ケース・スタディを通じて」『人口問題研究』56-3 (2000. 9) pp. 56~69)